

詩と出会う、 世界に出会う

「詩の指導に自信がもてない」という声を耳にすることがあります。一年が始まるこの時期に、詩の魅力、詩が育む言葉の力を考えてみましょう。



インタビュー

谷川俊太郎と 詩と言葉と

聞き手

宗我部義則

(お茶の水女子大学附属中学校教諭)

詩とは何か、どんな向き合い方ができるのか……。日本を代表する詩人の一人、谷川俊太郎さんの考える詩のすがたについて、谷川作品の魅力を味わいつくす授業実践を行ったばかりの宗我部義則先生が聞きました。

文章・濱野ちひろ 撮影・鈴木俊介

詩は、「個人のもの」

宗我部 先日、谷川さんの詩を教材にして、中学校二年生に授業を行ったばかりです。谷川さんには、作り手として「詩をこんなふうに読んでほしい」といった思いはありませんか。

谷川 それは全然ないんですよ。詩は「個人のもの」であることが多いから、一人一人の読みがあってほしい。自由に読んでほしいと思っています。

宗我部 谷川さんご自身は、お若い頃からたくさんさんの詩を読んでこられたのでしょうか。

谷川 そうでもないんです。でも、好きな詩をいろいろと読みましたね。

宗我部 例えばどのような詩でしょうか。

谷川 三好達治さんや、フランスのジャック・プレヴェールの詩などです。それから、詩ではないけれど宮沢賢治の童話ですね。そういったものから影響を受けています。

宗我部 好きな詩を見つけることが大切なんですね。

谷川 そうですね、それが最も大事だと思います。まずは広く浅く読んでみることで、その中でちよつとでも引つかかるものがあつたら、それを読み込んでみる。

宗我部 なるほど。とても大きなヒントです。たくさん触れて読み浸ることで、まずは自分の言葉を耕していくことが必要ですね。

谷川 ええ。何人もの詩を読んでみるのが大事です。そこから好きなものを知っていくんです。

詩人は、

世界をどう見ているか

宗我部 教育学者の足立悦男先生^{※1}が「認識の教育としての詩」ということをおっしゃっています。これは、詩人がどのようにこの世界を見ているのかに触れ、そこから自分の認識を省みてみよう、ということなんです。



谷川さんの詩を生徒に読ませてみたら、ある生徒は「生きていく」という詩に最も感動したそうです。「毎日の小さなうれしなこと、悲しいことの積み重ねで自分の人生が作り上げられていくと思うと、少し不思議な気がします。私は新しい視点をもらえるような詩が好きなんだと感じました」というのが彼女の感想です。

谷川 すてきな感想ですね。

宗我部 詩を読むことを通して、自分のものの見方や、自分がどんな人間であるかを知る。詩に触れていくことには、そういった経験としての意味もあると、私自身も改めて感じました。教科書に掲載されている「春に」(三年も、そうした意味で生徒に人気のある作品です。

谷川 この詩は三十代の初めの頃に書いた

※1 島根大学名誉教授。著書『新しい詩教育の理論』(明治図書)の中で、詩教材に内在する認識の力に焦点を当てた「見方の詩教育」を提唱。



日本語は、抑揚が大事な言語。 僕は、日本語の中にある音楽を大切にしたい。

もので、「人間の感情は、一つである場合は少ない」という実感から生まれたものです。悲しいといつても、悲しみ一色ということはありません。「悲しい」の中にも「うれしい」が混ざっていたりするでしょう。

宗我部 そういふ視点が生徒たちにはとても新鮮に感じられるようです。「こういう気持ちは自分の中にもある」と共感もしていました。

谷川 この詩が教科書に載ったとき、子どもたちから質問をもらったんですよ。「悲しいのうれしいって、どういうこと?」と。感情の中にも多彩な面があるはずだと刺激ができただけでも、きつと意味があったのだと思います。

声に出したときに きれいな詩を

宗我部 生徒から、谷川さんへの質問を預かっていきます。「詩を作るときに心がけていらっしやることは何ですか」。

谷川 声に出したときにきれいな詩を作るでした。
谷川 なるほど。そのような方法もあるのですね。それにしても、詩の授業は難しいでしょう。

宗我部 試行錯誤しています。詩の時間に連句(※2)を取り入れたりもします。

谷川 それは新鮮ですね。僕は詩の創作の授業では、俳句から始めるほうがいいという意見なんです。日本語の伝統的な七五調は基本で、やっぱり大事にしたほうがいい。そこから日本語の音楽を作っていくということは可能だと思います。

宗我部 連句の教材化に長年取り組んでいるので勇気づけられます。五七五という型が生徒たちの足かせになるかとも思っています。ですが、むしろ逆で、声に出して発表するときに達成感が得られるようなんです。

谷川 そうでしょう。定型があると、さまになりますからね。

「おいしい日本語」を 味わって

宗我部 谷川さんが感じていらっしやる詩のおもしろさとはどんなものですか。

谷川 「おいしい」かどうかです。僕は、詩は料理と同じだと思っていますよ。

ことですね。

宗我部 谷川さんの詩を読むと、生徒たちから「声で表したい」という意見が出てきます。それで「朝のリレー」を六〜七人で群読してみたことがあります。その中で、「声でリレーしよう」と、生徒からアイデアが出されたりします。そうやって読み方を工夫すること自体が楽しく、詩を読み込むことにつながっています。

谷川 本当にそうですね。そういう演出があると、群読も一種の演劇になりますからいいですね。ただ、どんな詩でも群読や斉読に合うわけではないので、先生にはそこを見分けてほしいとは思っています。声を合わせて読むとうるとすると、どうしても一定のリズムを刻むようになってしまう。それでは一行一行の細かいニュアンスは出ません。

僕の詩でいうと『ことばあそびうた』の詩は斉読に向いていると思います。声に出すことでわかってくる詩と、そうではない詩がありますね。

宗我部 声に出したときの詩の美しさを左「おいしい日本語」かどうかが最大の問題。例えば、機械などの取り扱い説明書は「おもしろくない日本語」です。詩はちょうどその対極にあるものです。

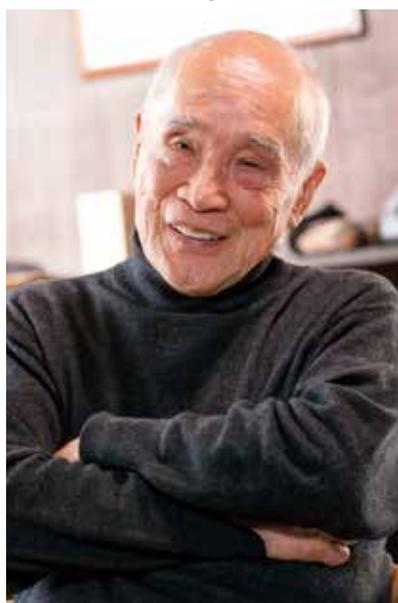
宗我部 日本語の「おいしさ」ですか。

谷川 つまりね、重要なのは言葉の意味だけではないんです。僕は、詩を音楽とよく比較するんです。連なる音符には意味があるわけではないでしょう。ところが皆、音楽に感動する。詩はわりと音楽に近いものなんです。もちろん、言葉でできていますから音符と同じようにはいかなしし、意味をもつのですが。しかし、読むときには詩の意味を知ろうとするのと同時に、意味ではない部分こそ味わってほしいです。

宗我部 生徒からどうしても聞いてほしいと言われた質問を最後にさせてください。

「人の心に刺さる詩や言葉はどうやって生まれるんですか」というものです。

谷川 それを目的にして書いているわけではないのですが、一つ言えることは、私に限らず詩人なら皆、その人の全生涯に関わる形で詩を書いているだろうということだと思います。どういう赤ん坊だったか。どういう親だったか。どう育てられたか。トラウマがあるかどうか。そういうこと全部がその人の感受性を形成していく。生まれたときか



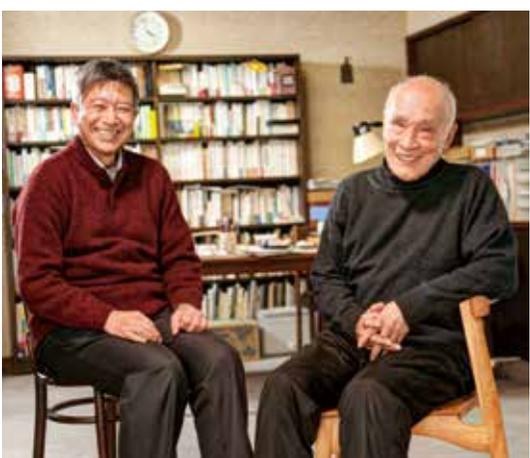
右するのは、言葉のリズムでしょうか。

谷川 リズムというより、日本語の「調べ」です。日本語は、抑揚が大事な言語ですから。僕が大切にしているのは、言葉の音楽的な要素なんです。日本語の中に内蔵されている音楽ともいえるもの。とはいえず、これは感覚の問題だから教えることも難しい。日本語の調べの感覚をもっている子も、もっていない子もいるでしょう。

宗我部 今回の授業では谷川さんの詩を生徒たちに自由に読ませた後、なかでも気に入った詩を書き写して、感想を書かせました。さらに、その詩に対して応答する詩を自分なりに書くという試みを行いました。一人の詩人の詩をこれほどたくさん読んだのは初めてだという生徒も多かったのですが、じっくりと読み込むことよって、まさに谷川さんの詩の調べを体感したようです。最後に生徒たちが書いた詩には、谷川さんから受け取った調べが現れているよう

ら、その詩を書くときまでの全ての瞬間が、一つの詩にも影響しているんですよ。

宗我部 ありがとうございます。生徒たちに伝えます。



たにかわしけん ちろう
谷川俊太郎

1931年、東京都生まれ。詩人。1952年、第一詩集『二十億光年の孤独』を刊行。詩作の他、絵本、エッセイ、翻訳、脚本、作詞など幅広く作品を発表し、著書多数。近年では、詩を釣るiPhoneアプリ『谷川』など、詩の可能性を広げる新たな試みにも挑戦している。近著に、『バウムクーヘン』(ナナロク社)。

そがべよしのり
宗我部義則

1962年、埼玉県生まれ。お茶の水女子大学附属中学校教諭。お茶の水女子大学非常勤講師。国立教育政策研究所「教育課程実施状況調査問題(中学校国語)」作成および分析委員。平成20年告示『中学校学習指導要領解説国語編』作成協力者。光村図書中学校『国語』教科書編集委員を務める。

※2 五・七・五の長句と七・七の短句を、一定の規則に従って交互に付け連ねる様式の詩文芸。